

Title	日本資本主義史論集(土屋喬雄氏編著, 育成社刊)
Sub Title	
Author	高橋, 碩一(Takahashi, Shinichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.3 (1937. 11) ,p.165(493)- 166(494)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19371100-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

五、美學(四頁半)、六、倫理(七三頁)、内譯1、倫理學(八頁)、
2、修身、道德(六五頁)、七、社會學(一二頁)、宗教の項に於て
一、宗教一般、神話傳説及雜書(二五頁)、二、神道(三六頁半)、
三、佛教(七一三頁半)、四、基督教(二六頁半)、第二門は、一、
教育學及教授法(七頁半)、二、教育學史、教育史(三頁半)、三、
學校、圖書館(一九頁半)、四、教育行政(二頁)、五、教育雜書(四
三頁半)に分たれ、この頁類の比率は自からその學問の實狀と歴
史を表示してゐる様に思はれる。總頁數一三二二頁、大體昭和十
一年三月末現在圖書館藏有の第一門一八、二九六冊、第二門一、
七五六冊、合計二萬五十二冊を収録したものであつて、前年報刊
行(大正十年度)以來十五年間に於ける増加冊數實に一萬一千七
百九十六冊(序文)、倍加の實狀を見て、この方面に關係諸氏の努
力が窺はれる。

かくて吾人は我等に直接關係のある歴史の部門の刊行の速かな
らんことを待望しつゝ、本部門の刊行によつて當圖書館利用者研
究者に一段の便益を加へたことを感謝するものである。(間崎万
里)

日本資本主義史論集

(土屋喬雄氏編著)
育生社刊

我が史學界はその近代的誕生後未だ日なほ淺しとは云へ、既に
幾多の華々しい論争を記録してゐるが、最近數年に互つて行はれ
た日本資本主義論争程に猛烈果敢なそれを未だ見なかつたと謂つ
ても過言ではあるまい。

書評

本書は同論争の一方の立役者たる東大助教土屋喬雄氏の右論
争に直接間接に關聯を持つ論文集である。その第一編を「農業史
の諸問題とし、新地主論を始め、山田氏の後役勢論批判」等日
本資本主義に於ける半封建性を纏る生々しき論戰の跡を集められ
てゐる。本論争は當面の論敵たるべき山田盛太郎氏が終に出馬せ
ず、加之、論争自體が衆知の如き事情で自然中止の形となつて既
に一の「歴史的事實」とされて居り、論争そのものを手頃に紹介
した論文や著書*さへ現れてゐるから、全てをそれに譲ることゝ
するが、只、土屋氏が講座派の人々の山田氏「分析」に對する態
度を以て信仰的セクト的なそれであるとし、之に一言でも加える
者があれば、團體的な力を以て之を壓せんとするものとして、そ
れらに對し端的に不満を表明されてゐるが、これは同論争を通じ
ての氏の不満の表示として買はるべきものと認める。

*後掲マニユファクチュア論争をも含めての日本資本主義論争
を經濟史の初學者にも判り易く、しかも論争の抑々の發端か
ら各新聞紙の小欄に至る迄巨細の別なく引用して本論争に對
する絶好の手引書となつたものに内田穰吉氏著『日本資本主
義論争』がある。一書の紹介中甚だ失禮ではあるが、右の書
には論争過程の諸論著の核心は手際よく引用されて居るから
山田氏「分析」が之亦衆知の事情で非常な高價となつて居る今
日、更にそのレーゾンドールを深められてゐる。但し惜し
むらくは右は全く客觀的見地に立つものとは受取り難く讀者
は之を更に公平なる眼を以て讀み分けることを必要とする。
第二編は「工業史の諸問題」とし、内容は主として徳川時代特

に幕末に於けるマニユファクチュアの問題を論ぜられたもの、之亦、服部之總氏が「日本資本主義發達史講座」中の「明治維新の革命及び反革命」に於て氏の舊著「明治維新史」に於ける、明治維新を以て世界市場形成過程の一環とする見解に對し、外國資本の過重評價なりと自己批判し、幕末を以て「嚴格なる意味に於けるマニユファクチュア時代」と名附くべしとする新説提唱に對し、土屋氏が之を不十分なる資料に基く速斷なりとした嚴マニユ時代説尙早論に端を發した所の所謂マニユファクチュア論争中の諸論文を集められたものである。併し乍ら、それらは該論争中の所産なりとは云へ、その内容は氏の十年一日の如きたゆまざる根本史料に即した努力研究の結晶であつて、論争より離れてなほ、日本經濟史研究上劃期的勞作と稱さるべきである。

なほ、附録として收められた大島、吉川兩氏の二研究は未發表なりしとは云へ、既に諸論著に引用せられてその學的價值を認められ來つたもの、特に大島氏のそれは桐生地方のマニユ發達を研究されて、既に羽仁五郎氏により前掲講座中にも紹介せられ、服部氏の新説提唱の根據となつたとさへ専ら風評さるゝもの、土屋氏の論敵服部之總氏が既にその論争關係諸論文を「明治維新史研究」(後に「維新史の方法論」と改題)として纏められたのに對し、土屋氏が漸く本書に於て論争關係諸論文を一括上梓されたことと共に、むしろ、その發表の遅かりしをかこつべきであらう。

明治維新研究者のみならず、苟も日本資本主義の本質に學問的興味を有するものにとつて大なる關心をもたしめた右論争も今や華々しき論戰の砲火を收めて、再び根本史料に基く實證的研究の

塹壕戦に入つたかの觀がある。今や時を得て本書によつて右論争の一應の清算が遂げられたことは、吾人をして更に聽て來るべき新なる百花繚亂たる學的成果への待望に心躍らしめて餘りありと云ふべきである。(本文三七〇頁 二圓八〇錢)(高橋碩一)

日英交通史の研究

(武藤長藏著
内外出版印刷株式會社發行)

著者武藤氏が當問題——日英交通史に關して從來發表せられたところは決して尠くない。先づ昭和四年十一月大阪朝日新聞社の發行せる「開國文化」には「日英交通史概観」(三九五—四七七頁)と題する一篇が收められ、その後昭和八年十一月には改造社發行の經濟學全集第二十八卷「世界經濟史」中に「日英交通史」(三一七—四一一頁)なる篇の採録せられたこともあつた。前者は則ちその年の春同新聞社が創立五十年を記念するための企ての一つとして開催した開國文化大講演會に於ける講演を基として成り、後者は則ち之を改訂削除したものである。而して此の他、更に河津暹博士の還曆祝賀記念論文集たる「經濟學の諸問題」中には「初期日英交通史の重要文獻」(六八七—六六頁)なる一篇が存するし、殊には長崎商業學校研究館年報「商業と經濟」にこれまで屢々掲載せられて來た「日英交通史料」の如き、著者が當問題に關して如何に傾倒し盡されて居るかを最もよく示すに足るものであらう。それは昭和三年十一月同誌の御大典記念號に第一回を發表してより以來正に九年、その數も既に十六回を重ねて、茲に擧げられた史料が二九五頁に三百の多きに及ばんとして居るので